

第9回（2001年4月5日）研究発表（要旨）

アニャデッロの戦い

——16世紀初頭のヴェネツィアの軍事・

政治問題に関する一考察——

面 地 敦

1509年5月14日、イタリアはミラノの東方約30kmにあるアニャデッロで、フランスとヴェネツィアとの間で大規模な戦闘があった。これがアニャデッロの戦いである。この戦いでヴェネツィア軍は敗れた。それから1ヶ月もたたないうちに、ヴェネツィアは、イタリア本土におけるヴェネツィア領（テッラフェルマ）のほとんどを失った。

この戦いの敗因として、ヴェネツィア軍の総司令官ピティリアーノ伯と副司令官ダルヴィアーノとの連携がうまく取れなかったことが古来言われてきた。すなわち、戦いを止めるよう指示したピティリアーノの言葉をダルヴィアーノは無視し、独力で戦い、その結果敗れたのである。だが、個々の指揮官の行動を批判するだけでは不十分であると論者は考える。そのような事態を引き起こした大きな要因が、ヴェネツィアの軍事システムそのものの中に内在していたと考えるからである。まず、中央政府が前線の指揮官に対して強力な命令権を持っていなかった。前線の指揮にあたる傭兵隊長（コンドッティエーレ）は政府に命令されるというよりは、政府と契約を結んで戦力を提供し、戦争を請け負うという要素が強かった。また、こうした指揮官と政府の間をつなぐ役割をもつ軍事顧問（プロヴェディトーレ）は、政府の方針を前線に伝えることは出来た。しかしいざ戦闘が始まれば、政府はその戦闘指揮を彼等に委ねることしかできなかった。そしてコンドッティエーレが契約に違反しない限り、政府が指揮官にその意向を強制することは困難であっ

た。

総司令官と副司令官との間の関係も微妙であった。副司令官はあくまで政府と契約を結んでいるのであって、総司令官と契約を結んでいるわけではなかったからである。だから、この戦場におけるダルヴィアーノの行動には非難される理由があったものの、必ずしも糾弾される行動とは言えなかった。実際、この戦いで捕虜になったダルヴィアーノがフランス軍から釈放されてヴェネツィアに戻った後も、ヴェネツィア政府は彼を罰することなく重く用いた。死去するまで、彼はヴェネツィア軍の中心的な人物として活動が続けた。それはピティリアーノも同様であり、彼も解任されることなくその生涯を終えた。

以上の考察の結果、ヴェネツィア共和国の軍事的・政治的体質が、この戦いの敗北の大きな要因になっている、と論者は考える。